

季語をいきいきさせる方法

副審査委員長 神野紗希

はじめに

俳句は、五七五のリズムにのせて、季語の力を借りて詠む、世界でいちばん短い詩です。季語を入れると、一年三六五日のどこかの今日、「いま、ここ」を描くことができます。すると、たった十七音が、まるで現実そのもののようにリアルに感じられたり、人のこころの芯をゆさぶったりする、魔法のことばになるのです。

では、俳句のなかに入れる季語を、もっといきいきさせるには、どうすればよいでしょうか。入選作品を例に、3つの方法を紹介してみます。

1

ふれたり、食べたり からだをとおして「いま、ここ」を刻む

私たちはふだん、いろいろなことを五感でとらえながら生きています。見たり、聞いたり、ふれたり、食べたり、嗅いだり。その感覚で季語をとらえて句に詠むと、読者もVRみたいに、その季語が目の前にあるかのようにリアルに感じることができます。

しゃぼんだまてにくっついてふるえてる

凜歌さん

「てにくっついて」と、自分がふれた感覚を核に、しゃぼん玉の存在感をあらわしました。ふるえながらそこにある、しゃぼん玉の「いま、ここ」が描かれています。

氷菓子三年坂で溶けはじめ

こころさん

古都・京都での散策風景ですね。氷菓子を食べている経過が「溶けはじめ」ということばであらわされていて、夏の暑さの中で氷菓子を手にしている「いま、ここ」が感じられる一句になっています。

.....

手にとれる季語は、ぜひ実際にふれたり食べたりして、句にしてみましょう。きっと、なにかとくべつな、自分だけの発見が見つかるはずです。

.....

2

季語のある風景にふみこんでみる

季語は、この世界にそれだけで存在しているわけではありません。その季語をとりまく風景や、季語の奥にあるものなど、まわりのものと一緒に季語を詠みこむと、季語がより立体的にみえてきます。

金色の稲ほの中のかやねずみ

玲子さん

秋の季語「稲穂」を、「金色」と表現したのもたしかな描写ですが、その稲穂の奥にいる「かやねずみ」を見つけたのが、さらに手柄ですね。人間だけでなく、かやねずみや雀など、ほかの動物たちの命も支えている、ゆたかな稲の姿が描き出されました。

地にはあな木にはぬけがらせみのこえ

柊吾さん

「せみのこえ」が夏の季語です。大地の穴から出てきて、羽化して木にぬけがらを残し、いま、成虫となって、たからかに生を謳歌している蝉。「あな」「ぬけがら」と、彼がおってきた痕跡をじゅんばんにたどることで、長い時間を経て、いま、この蝉が鳴いているのだという、時間の奥行きが感じられます。

.....

その季語がどんな風景の中にあるのか、カメラをズームしたり引いたりしながら、観察してみてください。

.....

3

季語の別の顔を見つける

私たちはつい、季語をありきたりにとらえてしまいがちです。ひまわりと背比べをしたり、かき氷で舌を見せ合ったり。こうした句は、実感はこもっているのですが、毎年たくさん作られるので、あたらしさに欠けるところがあります。

季語には、みんなが想像するイメージ、これまでに積み重ねられてきた意味があります。でも、それとは違う、私にとらえた季語の姿が描けたとしたら、その句はオンリーワンの、特別な句になります。

花火の夜そばから聞いた大空しゅう

れぶんさん

夏の夜、花火が響いています。その大きな音を聞いて、おばあちゃんがかつての戦争の空襲を思い出したのかもしれませんが。れぶんさんも、花火をとおして、知らないはずの大空襲を感じています。「大空しゅう」をとりあわせたことで、「花火」という夏の季語から、戦争や爆発、火のイメージを引き出しました。私たちがよく知っている花火とは別の顔ですね。

被災地の麦茶のコップ泥手形

結奏さん

家に帰ってきたら、冷蔵庫を開けて、きれいなコップに注いでゴクゴク飲む……そんな麦茶も「被災地」にあれば「泥手形」のついたコップの中にあるのです。暑い中、土砂をかき出しながら、麦茶を飲んで復興へと汗を流している人の姿が見えます。こんなところにも、麦茶があって、人の健康を支えているのです。

.....

季語の別の顔を見つけたり、意外な場所にある季語を見つけたりすることで、そこにたしかにある季語の存在感を、たっぷり描くことができます。きっと、季語もよろこぶことでしょう。

.....

おまけ

季がさなりでも、ていねいに

最後に、季がさなりについてひとこと。ふつう、俳句に季語はひとつまでがいいとされています。でも、どちらの季語も、その世界を描くのに欠かせない場合には、季がさなりもOKです。

夏まつりゆかたはりつく迷子のぼく

舜海さん

「夏まつり」「ゆかた」はどちらも夏の季語です。でも、この句は、夏まつりの日に迷子になってしまって、いつもと違う浴衣だから歩きにくくて、汗でへばりついた浴衣が不安をもっとかりたてて……どちらの季語も、いいたいことを表現するのに欠かせない要素ですね。

たとえばこんな句はどうでしょう。

悪い例：夏まつり終わってみれば夏の月

「夏まつり」と「夏」であることを書いているので「夏の月」の「夏」は必要ありません。そのぶんの字数で〈夏まつり終わってみれば白い月〉などと、よりくわしい描き方をすることができます。

要は、むだなことばがないように、ということです。ていねいに世界を描くための、むだのない季がさなりなら、どちらの季語もかがやかせることができます。

最後に

初夏の風天衣無縫の君が好き

勇輝さん

競泳を終えて水母となってゆく

大空さん

「初夏の風」が「天衣無縫の君」のまとうさわやかなオーラを、「水母」が競泳のあとのただよう心地よい疲労感を、それぞれ伝えてくれます。うまくことばにはできない気分を、季語に託して表現することで、その季語が、私の心そのものとなって、いきいきと語りはじめます。

季語をいきいきさせる方法は、これ以外にもたくさんあります。大切なのは、季語は生きものだということ。水母も稲も花火も初夏の風も、みんな、この世界で変化しながら生きている者たちです。その変化に敏感になれば「いま、ここ」にある季語の姿にも、自然と感動できるようになるでしょう。

ぜひ、生きている季語を見つけてください。そして、十七音に、その命をうつしとってください。